

世界でキラリ 先端技術

働く



品質勝負で人工宝石製造

信光社

サファイアやルチル(金紅石)など人工宝石を製造・販売している信光社(横浜市栄区)は、「横浜から最先端技術を世界に」をモットーに、浮き沈みを乗り越えてきた。柱の一つは、時計の文字盤を

米沢勝之社長



臆病に経営を行うこと。これが我が社の強みです。

私たちは市場をシェアで捉えていません。LEDで市場を席卷しようと思えば、短期的にはできますが、在庫が積み上がるなどのリスクがあります。あくまで「身の丈に合った経営」を大事にしています。

一つの事業に飛びつかず、技術力を元に様々な分野に種をまき、リスクの分散を図る。短期的な拡大や成長のチャンス逃しても、それでいいんです。

付加価値の高い製品の展開に取り組んでいけば、結果として、会社を永続させられると信じています。

「身の丈に合った経営」大事

覆う透明なガラス(風防)に利用されるサファイア板の製造だ。高い硬度や純度のあるサファイアは、数センチの高さから落としても割れず、紙ヤスリで削っても傷がつかない。耐久性が求められる高級時計に欠かせず、国内だけでなく、スイスの高級時計メーカーにも使われている。

もう一つの柱は、信号や照明で使われるLED用のサファイア基板。表面をマイクロメートル単位で平らにする技術などが国内外のLEDメーカーから高い評価を受け、2000年代後半には世界シェアの3割を占めた。その後は、中国や韓国などの同業者の攻勢を受けているが、価格競争には乗らず品質で勝負している。

「経営に大やけどを負った」と社長が振り返る時期がある。98年ごろからのITバブルで光ファイバー用の通信部品の需要が沸騰。ルチルを利用して光を一方向にだけ通す世界最小の装置を作っていた同社には、世界中から注文が殺到した。97年まで25億円前後だった年商は00年に約68億円で急成長。生産が間に合わず、急ピッチで設備を増強し社員も増やした。

信光社 1947年創業。帝国データバンク横浜支店によると、人造宝石製造を主な業務にする全国5社のうち売上高は1位。昨年12月期決算で年商約35億円。社員数約160人。勝之氏は創業者の義父義史(よしかず)氏の後を継ぎ、1998年に社長に就任。68歳。

(佐野憲太郎)